

第8回「武蔵野美術大学建築学科竹山実賞」審査選評

[審査総評] 竹山 実 審査委員長

竹山実建築賞を選び終えて

今回も力作がそろいました。いろいろと検討を重ねた結果、受賞作は以下の2作品(制作者4名)に決めました。いずれも住宅作品ですが、その構想力や感覚に新しさを感じました。

「二重の思考から建築を実現する試み」 (小泉一斉君：1996年卒業)
(千葉万由子君：1998年卒業)
「MAMETALO」 (船曳桜子君：1999年卒業)
(内海 聡君：2001年卒業)

小泉・千葉君の作品は住宅ですが、その表現を成立させる思考回路がうまく説明されていて、はなはだ説得性があります。

「私たちはもはや確信を得た。行為と移動、あるいは異なる機能といった共存しえない2以上の空間を分節する行為では、何を分け、どのように配置し、つなぐか、それらの思考のバリエーションによって建築の可能性を幾分広げることができるであろうということを、だ。」

これは作者の言葉そのままです。とかくこの種の思考回路は自律性が強くて、優れた表現と結びつかないことが多いのですが、ここではそれが3つの作品にうまく結実している点が良いと思われました。作品はいずれも端正でエレガンスに満ちています。私が一番評価したいのは、彼らの透明な思考と美しい表現のバランスが良くとれているという点です。そこには何か詩的な香りが漂っています。

一方、「MAMERALO」は中目黒に完成した小住宅です。ここでは実践そのものが意味をもちます。作者のいう「近視眼的なアプローチ」が内部の空間処理や仕切りや開放部などによく読み取れます。加えて「カフェオレ色」に塗られた外壁は、この住宅のデザイン意図をよく表していて、周辺との関わりを残しながらも、自らのアイデンティティーをとどめようとしています。ここでは、とかくおろそかにされがちな生活者の日常的な感覚が大切にされているようです。実は、そうした感覚は住宅だけでなく、建築の実践において大変有益なのだと思います。

上記の作品以外に指摘しておきたい応募案が2つあります。「Audi A1 shop」(岩切茂君)と「SHARE HOUSE PROJECT」(坂田夏水君)です。前者は車のショールームですが、なかなか良くデザインされています。ここでは車のように、どこにでも動く建築が提案されています。建築の土着性という問題を僕は考えさせられました。後者は完成した作品というよりも、むしろ果敢なアクションです。これから先が大いに期待されます。(以上)